

あとがき

幾たび日米間を往復したことであろう。

多くの出会いがあり、それぞれに宝物であるが、忘れることのできない思い出に雄山閣出版社元出版本部長芳賀章内氏との出会いがある。

一九九一年初夏、紆余曲折を経て、アメリカ・ヒューストンから七〇〇枚余の写真を携え、東京都飯田橋の雄山閣を訪れた。緊張の余りからだはこちこち、ことばも出ない。が、しばらく原稿に目を通されていた芳賀氏は「やりましょう」と即応された。涙が滲んだ。鉛筆だこをなでながらこみ上げる安堵の思いを嘯みしめた。

翌年には『尾形乾山—全作品とその系譜』三冊と附録（雄山閣出版一九九二年刊）となり、数年後には『乾山焼入門』（雄山閣出版一九九九年刊）の刊行となるが、全ては芳賀章内氏のご理解あつてのことである。健康を害され、只今はご闘病中とのこと、やさしくきびしい激励は、今なお研究の継続、新たな領域を開拓する支柱、指針となっている。

研究当初、乾山焼は数寄者、やきもの趣味者の鑑賞陶器とする理解が多くを占めた。が、文書研究、作陶実践、乾山焼を管見させていたく度毎に、乾山焼の背後にある製作意識の高さとすぐれた技、調和の美と巧みな構想に引き込まれた。日本では江戸時代、すでにこのようにすぐれた新趣のやきもの、陶の領域を超える作陶が行われていたのである。進歩は時代の故ばかりではない。個々の発揮する力にこそ新たな創造を生み出す強さのあることを教えられる。

好き嫌いは万人の自由である。が、鑑賞と鑑識は大きく異なる。曖昧さ、その不明瞭さの故に昭和三七年（一九六二）乾山焼には新佐野乾山事件が興された。好きであれば真贋のみが問題となるのではない。が、研究となればそれ相応の判断基準が求められる。

乾山焼の摸倣は今に始まることではない。乾山在世時代に遡り、二代猪八、代々乾山時代へと継続するが、元禄二年鳴滝山に開窯、宝永・正徳年間には刊行物にも取りあげられた乾山焼は、意匠の意外性、形状の特異性、色彩の豊かさなど、もとより衆目を集め、評判を得るやきものであった。洛中に進出、二条丁子屋町に活躍する折には東山諸窯において摸倣は盛行（『陶工必用』）。土産物となり、京焼共同生産品目の一つとなるが、洛中では借窯をし、原料や顔料の融通を受ける。自ずと陶工との交わりも深みを増すと考えるが、乾山は陶家の出自ではない。問われれば何ら秘することなく、陶技・陶法を教えたものと推考する。

『陶工必用』『陶磁製方』には、「乾山一流」「私家傳秘薬」とはある。が、佐野、大川顕道手控以外に「他見他言有間敷」とした語は認められず、このたび見出した「初代乾山口述二代筆記」写本にも「傳と作すこと堅く無用となすべきもの也」とある。乾山陶法を秘伝とすることへの執着はみられず、同書を初代乾山伝とする理由の一つとして呈示した。

乾山焼は生業である。が、乾山は文人としての修練もあり、数寄者の陶芸としての心意気があつたであろう。孫兵衛伝は口授であるが、「秘伝」とした語は陶法を伝授した仁清伝、二代乾山を継承した猪八伝に認

められる。陶家・陶工としての意識・認識が関わりをもつと考える。

道具商人が活躍、一方、みやこを訪う人々は乾山焼を携えて故郷へ帰る。真贋に拘わらず地方へ乾山焼が持ち込まれ、各地の遺跡からも乾山焼摸倣陶片が出土する。地方においても作陶摸倣は行われていたのである。

細部の究明、併せて総体の把握と検証。乾山焼が日本のやきもの史上に占める位置、役割を確認したが、直接には各作品群の様式、銘、出典の究明、陶技・陶法の理解、後世への影響など、間接には時代の流れとその受容、兄光琳の助力と影響などを視野に入れる。系統的、伝記的、美術史的、考古学的、さらには化学的領域へと踏み込むことに努めたが、乾山没して三〇〇年余の時の隔たり、限られた作品、限定された文書、資料を前に、道は遠く、しばしば「じつと手をみる」の心境であった。

海外に籍を置いた我々は、暗闇にあつて右往左往するもぐらであつた。今ももぐらに変わりはないが、一九九三年、テキサス州ヒューストン、ライス大学から、国際基督教大学美術史・考古学教授として日本へ移籍。研究も続行するが、二〇一二年、本大学ICC（キリスト教と文化研究所）から研究発表の招きを受ける。

京都では乾山初開窯の鳴滝窯の発掘調査が終了していた（立命館大学）。留学中より着手していた陶片研究、化学分析も途上であり、本大学副学長故齋藤和明氏の支援のもと、発掘には助手林徹氏、田畑幸嗣氏、学生数人とともに参加させていただいた。

一方、京都大学では同大学附属病院構内の発掘調査が完了していた。

同所には乾山焼二代尾形猪八の聖護院工房を推測。果たして猪八関係の作品陶片、窯の一部などが出土した。聖護院蔵の作品に合わせ、乾山焼二代尾形猪八の存在を確認したが、同時にそれは乾山が佐野において認められた『陶磁製方』、さらに以下の内容を証明する結果となつた（傍線筆者）。

干今繪之風流規模ハ光琳このミ置候通ヲ用 又ハ私新意ヲ相

交 愚子猪八二傳 唯今ハ京鴨川ノ東聖護院宮様御門境ニて

本焼内焼共相勤罷有候

時間じくして、当方も収集、採取していた陶片、法蔵寺（春日純精氏採取を含む）、蛭川家、川喜田家ほか分散していた鳴滝窯出土採集陶片七〇年の記録が纏まった。本大学考古学研究センターでは実測図の作成も完了。鳴滝窯、聖護院工房の出土品に合わせそれらを集成、二〇一三年「乾山焼 陶片資料とその工房」と題して考古学的調査・研究を発表した。

のち一〇年の歳月が流れた。新たな発見もあり、一年に一度の発表は本年小冊子九冊を数えていた。加筆事項を含め、このたび集成編の着手となつたが、本大学と大学図書館、キリスト教と文化研究所、旧考古学研究センターの皆さまには多大なお力添えをいただいた。今日、考古学研究センターは存在しないが、私事も退任。ともに時を過ごした小田静夫氏、小日置晴展氏、小日置能生子氏、河野一平氏、大賀秀実氏、中津由紀子氏、長井充子氏、田畑幸嗣氏ほかセンター員のみなさまには万感の思いをこめて、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

雄山閣出版元出版本部長芳賀章内氏、聖護院及び聖護院御門跡宮城泰年師、法藏寺と元住持故坂口貞光師、故弘道師、故光彰師、西川秀敏師ご夫妻、善養寺と住持館克亮師ご夫妻。

京都市立芸術大学元学長故佐藤雅彦氏、同大学元教授故栗木達彦氏、故中田勇次郎氏、故大西政太郎氏、故小山喜平氏、京都市考古資料館元館長故小川武氏、故中村敦氏、故木下平八郎氏、京都大学埋蔵文化財センター故清水芳裕氏、故大槻幹郎氏、東京大学美術史学元教授故山根有三氏、名古屋大学元教授故檜崎彰一氏、故山崎一雄氏、故田賀井秀夫氏、故磯野風船子氏ご夫妻、故川喜田貞久氏ご夫妻、故蜷川親正氏、故柳孝氏、故瀬津巖氏、故瀬津孝子氏、故ジャネット・リーチ夫人、故ローズ・ヘンペル氏。

さらに瀧澤記念館瀧澤雅夫氏・邦子氏ご夫妻、京都大学元美術史学教授佐々木丞平氏、川崎博氏、同志社大学校地学術調査委員会鈴木重治氏、MOA美術館館長内田篤呉氏、根津美術館顧問西田宏子氏、五島美術館元副館長名児耶明氏、共立女子大学教授長崎巖氏、立命館大学元考古学教授和田晴吾氏、木立雅朗氏、東京学芸大学教授二宮修治氏、学習院大学元美術史学教授小林忠氏、東京大学元美術史学教授河野元昭氏、丑野毅氏、法政大学能楽研究所山中玲子氏。

十五代樂吉左衛門・直入氏、堤焼針生乾馬氏、針生和馬氏、高取焼亀井楽山氏、京焼西村徳園氏、西村徳泉氏、小川長楽氏、稲葉直人氏、高坂嘉津幸氏。

パリノ・サーベイ考古学研究室橋本眞紀夫氏、古泉弘氏、川口宗道氏、

内野正氏、大八木憲司氏、長井光彦氏、森村健一氏、川澄一司氏、小池寛氏、永田信一氏、山本雅和氏、野芝勉氏、小檜山一良氏、千葉豊氏、富井眞氏、佐藤隆氏、朝賀浩氏、吉田宏志氏、城野誠治氏、森奥安吉氏、畑中章良氏、雨宮六達子氏、加藤真司氏、竹内弘光氏、林順一氏、大橋康二氏、矢部良明氏、竹内順一氏、荒川正明氏、小俣悟氏、鈴木泰浩氏、戸口一雄氏、田島充氏、古曾志隆氏。鬼籍に入られた星野裕子氏、小野田伸子氏、小笠原成吉氏。

ルイス・コート氏、トーマス・チェイス氏、クラウス・F・ナウマン氏、サリー・ハノン氏、パトリシア・フィスター氏、モーガン・ピテルカ氏、アラン・マタザオ氏。

別して本大学図書館黒澤公人氏、南和子氏、長濱峻平氏、河村貴子氏、五十嵐孝子氏、安達彰子氏。ICC元所長ジェレマイア・L・オルバーグ氏、矢嶋直規氏、現所長魯恩碩氏、助手小平友美氏には温かなご支援をいただいた。遡り高木久夫氏、美添真樹氏、山口京一郎氏、土屋宗一氏、木戸口聡子氏、並木英子氏。

末尾ながら、印刷を担当してくださいました「白峰社」のスタッフ、オペレーター各位には多大なご理解、御力添えをいただいた。瞞腔の謝意を表します。

ありがとうございました。